

地獄か極楽か
源信の「死の教科書」

【絵入り】 往生要集

大角 修 著



はじめに 『往生要集』を読む

『往生要集』は平安時代中期に比叡山ひえいざんの僧げんしん源信えしん（恵心僧都えしんそうず／九四二～一〇一七年）があらわした。跋文ぼつぶん（あとがき）に「永観二年冬十一月に書きはじめ、翌年の夏四月に終えた」とあるので、大部の著述なのに、西暦一〇三三年の冬から半年ほどで書き終えたことになる。

この書物は地獄のありさまがくわしく記されていることで有名だが、それは輪廻りんねの六道ろくだうのひとつで、じつは人道にんどう（人間界）の描写のほうがおぞましい。肉体は汚物のかたまりだし、死ねば遺体いとうが腐うじむって蛆虫しゅうじむしがたかり、野ざらしの白骨びやくこつになってしまう。そんな六道ろくだうの穢土えいど（穢けがれた世界）を厭いとい離りれて、浄土じやうどを欣ねがい求めよ。すなわち厭離穢土おんりえいど・欣求浄土こんぐじやうどが『往生要集』の趣旨である。書名の示すとおり、そのための要文を經典や論書から集めたのだという。

ところが、「正法念処經しやうぽうねんじよきやうにいわく」「法華經ほけきやうにいわく」「無量壽經むりやうじゆきやうにいわく」といつた引用が延々とつづいて、きわめて読みにくい。これは教相判釈きやうぽんげんじやく（教判）といわれる方法による論証のためである。

經典は釈迦によって説かれたという前提に立つが、經典の数は多く、内容もさまざまである。

そこで經典の内容を比較検討して自身の思いに合う部分を抽出し、それをもって自身の信仰の眞実の証明とする。それが昔の仏書に共通の方法だった（「第六章 極楽はあるのか」参照）。『往生要集』でも「○○經にいわく」の連続である。ところが今では、「○○經に書いてある」というだけでは論証にならないので、延々とつづく引用に嫌気がさしてしまふ。

本書は、その読みにくさのために読み通すのは難しい『往生要集』の要点を抽出して現代語に訳し、全体を見渡せるようにした。

『往生要集』は日本人の死生観に非常に大きな影響を与えた書物である。そのため本書では、日本の仏教や風習にどんな影響をおよぼしたのかを解説した。

掲載した木版の絵は江戸時代の『和字絵入往生要集』（天保再板本）の挿絵である。現在も古書店で入手が容易なほど多く発行されており、民衆に広まった『往生要集』の世界を表している。



地獄の閻魔大王 閻魔大王が引き連れられてきた亡者（死んだ人）の罪を調べて閻魔帳に書きつけている。この図は江戸時代に木版で刊行された『和字絵入往生要集』の挿絵。以下、図は同書の挿絵である。



亡者の罪を測る この図は閻魔大王の前におかれた罪の測り器。右上は生前の罪を映しだす浄玻璃の鏡。その左は業の秤。下部に鬼が引く火車に乗せられて閻魔の前に連れてこられた亡者が描かれている。

【絵入り】往生要集 もくじ

はじめに 『往生要集』を読む 2

『往生要集』の趣旨と内容 8

第一章 自分の心に縛られて——大文第一「厭離穢土」①地獄界 11

第二章 さまよう亡者——大文第一「厭離穢土」②餓鬼界 49

第三章 天にも安息はない——大文第一「厭離穢土」③畜生界・阿修羅界・天界 58

第四章 無常の憂き世——大文第一「厭離穢土」④人間界 67

第五章 はるかな仏の国——大文第二「欣求浄土」 85

第六章 極楽はあるのか——大文第三「極楽の証拠」 99

第七章 阿弥陀仏を念じる——大文第四「正修念仏」 115

第八章 念仏の実践——大文第五「助念の方法」 126

第九章 念仏の行と法会——大文第六「別時念仏」① 137

第十章 臨終行儀と二十五三昧会——大文第六「別時念仏」② 146

第十一章 十念往生——大文第七から大文第十まで 172

おわりに 『往生要集』の地獄には地藏菩薩がない 181

第二章 さまよう亡者——大文第一「厭離穢土」② 餓鬼界

飢えた餓鬼

餓鬼がきは餓えにさいなまれる亡者もうじや（死後にさまよう者）である。

餓鬼の数は非常に多くて、いろいろな姿がある。源信は、そのいくつかを説明するという前提で、まず鑊身かくしんとよばれる餓鬼をあげる。その鬼の手足は鑊かく（釜）の脚のようで、熱火が身を焼く。生前に財物に執着して殺生をした者がおちる世界だ。

また、食吐じきとという餓鬼がいる。人が嘔吐おうとしたものを食べるのだが、なかなか食物は見つからない。食気じきけという餓鬼は、人々が供養くやうのために焚く線香のにおいだけを食べて生きている。これらは生前に自分だけ美食を食べていた者である。

そのほか、いろいろな餓鬼がいる。一日に五人ずつ子を生み、その子らを食べてしまっけれど、まだ飢えているという哀れな餓鬼もいるし、自分の頭を破って脳を取って食べるほかに食物がないというすさまじい餓鬼もいる。よく知られているのは次のような姿だろう。

外部の障害のために食べることができない鬼がいます。いつも激しく飢渴して身体は痩せ細っているといます。たまたま清流を遠くに見て走っていても、大力の鬼がいて杖で打ち、水は火に変わってしまったり、たちまち涸れてしまったりするのです。

また、内部の障害で食べることができない鬼がいます。口が針の孔のように小さく、腹は大きな山のように、たとえ飲食物を見つけても、食べられません。

また、そのような内外の障害はないのに食べることができない鬼がいます。たまたまわずかの食物を得て食べると、食物は炎となり、身を焼いて尻から出てくるといいます。

慳貪と嫉妬の者、すなわち生前に物を惜しんで欲張りだったり、むやみに他人を嫉妬した者が餓鬼道におちる。この餓鬼の哀れさは『往生要集』大文第一「総決」に、竜樹（古代インドの仏教哲学者ナーガールジュナ）の偈として次のようにうたわれている。

清冷秋月患焔熱

清冷の秋月にも焔熱を患え

温和春日転寒苦

温和の春日にも転た寒え苦しむ

若趣園林衆果尽

若し園林に趣けど衆果尽き

設至清流變枯竭

設たどい清流せいりゆうに至いたるも變へんじて枯竭こかつす

罪業緣故壽長遠

罪業ざいごうの緣えんの故ゆえに壽長遠いのちじょうおんにして

逕有一万五千歲

逕ふること一万五千歲さいあ有り

受衆楚毒無空欠

衆もつものの楚毒そどくを受うけて空むなしく欠かくること無なきは

皆是餓鬼之果報

皆みな是これ餓鬼がきの果報かほうなり

〔意訳〕

餓鬼道に望みは絶えて秋の月さえ熱く、春の陽さえ凍えている。飢えて果樹の林に行けば実が落ちてしまい、渴いて清流にたどりついても水はかれてしまう。もはや死にたくても死ねず、一万五千年も休みなく苦を受けるのは、みな貪欲とんよくの罪によつて餓鬼の世界に生まれた結果である。



餓鬼道の図(1) 中段に飯を備えた施餓鬼棚と読経して供養する僧の姿がある。そのまわりに飢渴に苦しむ餓鬼どもがいる。なかには供養の香の煙だけを食べる餓鬼もいる。



餓鬼道の図(2) 腹が異様にふくれあがった餓鬼の前には飯があるが、供物の飯も食べようとする炎になって燃え上がる。

三界万霊供養

ところで、源信は「餓鬼」の項の冒頭で、「餓鬼どもの住処じゆうしょに二つがあります。一つは地の下五百由旬ゆじゆん、そこは閻魔王えんまの領域です。もう一つは人間界と天界の間にあります」と述べている。地下五百由旬は地上と地獄（地下一千由旬）の中間で、そのあたりに餓鬼がいるというのは今も一般的なイメージであろう。そしてもう一つ、地上と天界の中間にも餓鬼の住処があるというのは、遠いインドの死生観につながるものだ。

インドでは来世には天界に昇ることが理想とされた。しかし、すぐには天てんに転生てんしょうできない。死後四十九日は中有ちゆうう（中陰ちゆういん）という宙ぶらりんの状態にあり、遺族が七日（一週）ごとに死者の祭りをすれば、死霊は天に昇っていくといわれた。その天界に昇る途中の霊をプレータプレータといい、「餓鬼」と訳されたのである。まさに人間界と天界の間に餓鬼の世界があることになる。

プレータはまた、死後一年間の霊をも意味し、供養くようされずにとどまっている幽鬼ゆうきをもいう。日本ではえば成仏じやうぶつしていない霊であり、その中間性を餓鬼道の位置が象徴している。

この餓鬼道については仏説盂蘭盆経ぶつせつうらんぼんきやうに説かれている目連尊者もくれんそんじやの母のことが有名だ。

目連は釈迦の直弟子で、神通第一と称せられる。死んだ母の姿を求めて冥界をのぞきみたところ、あろうことか、母は餓鬼道で逆さづりの苦をうけていた。目連は母を救う法を釈迦に問い、

七月十五日に供養の法会をおこなうべきことを教えられる。それが盂蘭盆会つまりお盆の始まりといわれることで、盂蘭盆という言葉はウランバナ（逆さつり）の音訳である。

また、施餓鬼供養の由来を説く經典に、救拔焰口餓鬼陀羅尼經がある。次のような内容である。釈迦の弟子の阿難が坐禪していると、焰口という餓鬼が現れた。醜く痩せて喉は細く口から火を吐いている。

その餓鬼が阿難に「お前は三日後に死んで餓鬼になる。しかし明日、餓鬼たちが大勢集まるので食べ物をお供えよ。そうすれば寿命は延びる。自分の餓鬼の苦悩も除いて天界に生まれさせてくれ」と言った。

阿難が釈迦如来に教えを求めると、「観音菩薩の秘呪（陀羅尼）を唱えて加持すれば一つの器の食べ物でも無量の食物となり、一切の餓鬼の空腹を満たす」ということであった。それにより、阿難の命は助かり、餓鬼どもも救われたという。

先の盂蘭盆経でも来世の苦悩として地獄ではなく餓鬼をあげるのは、よく飢饉に見舞われた昔、痩せ細って腹だけ異様にふくれた飢餓の人の姿が現実に見られたからだろう。

そのように飢えに苦しみながらでなくても、この世に思いを残して死んだ人は多い。戦争で死んだ人や地震・津波などの災害で死んだ人、人の食料になった家畜や魚の霊など、日常の世界のまわりには目に見えないものが満ちていると感じられた。それら諸霊の安らぎを祈って「三界萬靈供養」の札を立て、精霊柵に食物をお供えするのが施餓鬼供養で、その法要を施餓鬼会という。



三界萬靈供養塔 餓鬼だけでなく、有縁無縁の万靈（あらゆる靈）の静まりを祈る。（東京都台東区谷中・長安寺）

現在、施餓鬼会はお盆の時期におこなわれることが多い。冥界の飢えた者に食物を施して慰める法会という意味で施食会せじきえともいわれるのだが、そのさい、「三界萬靈さんがいばんれい」の牌はいを立てて読経どききょうするなど、実際には餓鬼道の幽鬼にかぎらず、有縁無縁うえんむえんの万靈（あらゆる靈）、なかでも各家で供養くわんぎやうされない無縁仏むえんぼつが成仏じやうぶつできるように供養するということ意味あいが強い仏事である。



川施餓鬼灯籠流し 川は異界への通路であり、供物や灯明くもつ とうみょうを乗せた舟を流すなど、各地に川施餓鬼の風習が伝わっており、現在は花火大会になっているところもある。写真は岐阜県高山市。(PIXTA)

第十章 臨終行儀と二十五三昧会——大文第六「別時念仏」②

死に臨む心得

『往生要集』の第六「別時念仏」のうち臨終の別事、すなわち臨終行儀は近年、終末期の臨床宗教との関連で語られることも多い。この項は、次のように書きだされている。

祇園精舎の西北の隅、日が沈むほうに無常院があり、病人がでると、その中に寝かせました。人は煩惱に染まっていて、ふだんの住まいにいと、衣類や日用品を見て心に愛着をおこし、むなししい日常のことを離れたいとは願わないので、別の建物に行かせるのです。

その堂を無常院といいます。(中略)その堂の中に立像の仏を置きます。顔は西方に向け、右手は挙げ、下げた左手「1」には長く垂れた一本の五綵の幡「2」をつなぎます。

病人が安心できるように仏像の後ろに寝かせ、左手に幡の端をにぎらせませす。阿弥陀仏に

引かれて浄土に往く意をおこさせるのです。看病の人は香を焚き、花を散らして病人が厳かであるようにします。病人が便をもらしたり、唾をはいたりしたときは、そのつど取り除くのです。

また別の書物には「仏像を東に向け、病人を前に寝かせる」とあります。私見を述べれば、無常院がないときは、ただ病人を西向きに寝かせて、香を焚き、花を散じて、いろいろと力づける。あるいは、美しい仏像を見させるのがよいでしょう。

〔1〕右手は挙げ、下げた左手は「いわゆる来迎印をとる阿弥陀仏で、来迎図や浄土真宗の仏壇の本尊などにみられる。

〔2〕五綵の幡＝五色の幡（細い縦長の旗）。

祇園精舎は積尊時代の僧院の一つで、北インドにその遺跡がある。日本では『平家物語』の冒頭の言葉で広く知られている。

祇園精舎の鐘の聲 諸行無常の響あり

沙羅双樹の花の色 盛者必衰の理をあらわす

沙羅双樹とは二本のサーラ樹のこと。サーラはインドには普通に見られる高木で、釈迦は八十



祇園精舎跡 この僧院に臨終の人を寝かせて浄土に送る無常院という建物があつたと『往生要集』にいう。(PIXTA)

歳で入滅するとき、サーラ樹が二本ずつ四隅に立つ中にしつらえられた床に、頭を北に横たわり、顔を西に向けて世を去った。そのおり、沙羅双樹は時ならぬ花を咲かせたという。また、沙羅双樹は枯れて白い鶴のような姿になったと伝えられることから臨終の場を「鶴林」ともいう。

ところが、釈迦が入滅したのは祇園精舎ではなくクシナガラクシナガラの町である。そこには横たわった釈迦の涅槃像をまつる涅槃堂がある。にもかかわらず、『平家物語』が「祇園精舎の鐘の聲しよぎやうむじやうひびき 諸行無常の響あり」と語るの『往生要集』にあるように、祇園精舎に臨終の人を寝かせる無常院があつたと伝えられていたからだろう。

ちなみに『平家物語』は鎌倉時代にうまれた平家の盛衰を語る戦記物語であるが、

むすびの「灌頂卷」は「韋提希夫人の如くに、みな往生の素懐をとげけるとぞきこえし」という言葉で終わる。韋提希夫人はインドのマガダ国の王妃で、釈迦如来から阿弥陀仏と極樂の觀法を説く觀無量壽經の教えを授けられて極樂に往生したという。亡んだ平家の一門も皆、韋提希夫人のように、日頃から願っていた極樂往生を遂げたということである。

臨終の作法

『往生要集』には、つづいて善導（中国淨土教の祖師）の教えだという臨終の心得が記されている。

念仏の行者が病み、あるいは老いて命を終えようとするときは、これまで説いた念仏三昧の法によって身心を整えて顔を西に向け、一心に阿弥陀仏を觀じて心にも口にも仏を念じ、絶えることなく「南無阿弥陀仏」ととなえて往生を想い、花台の聖衆「I」が来迎するさまに思念をこらしなさい。

そうして極樂に往生するようすが見えたら、すぐに看病の人に話し、看病の人は、聞いたことを筆記しなさい。病人が話すことのできないときには看病者は必ず何度でも、どんな世界が見えたかを病人に聞くのです。もし罪の報いをうけていると話すなら、そばにいる人は

ときには日頃の比叡入山の禁もゆるめられ、多くの人が参拝したということである。

往生院の作法と心得

病人の世話をする仏教の施設は、古く奈良時代からあった。聖武天皇の後の光明皇后（七〇一〜七六〇）が窮民救済のために興福寺につくった悲田院・施薬院の二院、行基（六六八〜七四九）がつくった布施屋などである。それは悲田・福田とよばれる考え方によるもので、『往生要集』にも「もし仏の福田に善を植えればかならず涅槃（さとり）の平安」を得る」（大文第七「念仏の利益」当来の勝利）という。

悲田とは「慈悲の福德が育つ田」という意味だ。他者に慈悲をほどこすことが自身の善業（未来に幸福をもたらす善いおこない）となる。慈悲の対象の病人や貧者は自分に幸福をもたらしてくれる福田（幸福が育つ田）とされた。源信の「定起請」第九条にいう往生院の定めも悲田・福田につながるが、明確に臨死の人を対象としている点で現代の終末ケアやホスピスにも通じるものがある。以下、この条の内容を改めて意識で紹介する。

人はいつか病いになるというのに、二十五三昧会に結縁の人々は自分の家もなく、草葺き

の庵いおりで寒さをしのぎ、粗末な食物で日々を送っている。そのうえ、病氣になつて床に臥ふせつても、だれが哀れんでくれようか。鶯うぐいすが鳴き山桜の散り始める春の宵にはだれもが花を惜しんで楽しみ、雁かりが空を渡り庭の菊も枯れゆく秋の朝には、だれもが遊宴を思う。そのようなとき、だれが病人を哀れみ、ねんごろに看病してやれるだろうか。

この会えは、往生したいと願つて集まつた者ばかりであるが、それでも、死にゆく人を疎うとんじること自然におこつてこよう。それゆえ、この結衆の力を合あわせて一宇いちうの草堂を建立し、阿弥陀如来を安置して一同の終焉しゆうえんの場とするのである。

病人が臨終に及ぶとき、三愛さんあいをおこさないように皆で手立てを講じる。

方角や日時の吉凶を論じず、病人は皆、往生院に移して皆で養うこととする。

仏像を西に向けて病人をその後ろに置いて従したがわせる。仏像の右手に五色の幡はたを結び、これを病人の左手に持たせて、仏に従つて往生する思いをなさしめよう。

焼香せんかうや散華さんげで病人を莊嚴しやうげんし、調味・撰食せんじき（適切に選んで味付けした食物）で病人を養う。さらに、一個の棺を置いて茶毘たびに備えておくものとする。

臨終におこさないようにする三愛とは、境界愛きやうがいあい・自体愛じたいあい・当生愛とうしやうあいの三つの愛着をいう。

境界愛は家族や財産にこだわる心。それが安らぎを乱すことは言うまでもない。

自体愛は自分の身体への愛着。現在、終末期の延命医療や臓器移植、脳死をめぐり、一人ひと



源信の墓 横川中堂から徒歩で15分ほどのところにある。ここが二十五三昧会の墓地(安養廟)かどうかは不明だが、石柵で囲まれた源信の墓の周囲に五輪塔などの墓石が数多く立ち並んでいる。昔の僧たちの墓塔群である。

おわりに 『往生要集』の地獄には地藏菩薩がいらない

地獄にも地藏菩薩がいて苦しむ人々を救ってくれる。とりわけ賽の河原で子どもたちを鬼から守ってくれる地藏菩薩の話を知らない人はあるまい。

ところが、『往生要集』には「地藏」の語は六回出るだけで、肝心の「厭離穢土」の地獄の項にはまったく登場しない。大文第二「欣求浄土」には「地藏菩薩は毎日晨朝に禪定に入つて法界をめぐり衆生の苦を抜きたもう。この菩薩の悲願は他の菩薩を超える」（聖衆俱会の楽）とあるけれど、それも文殊菩薩や観音菩薩と併記されているにすぎない。日本人の〈あの世〉の重要な要素である地藏菩薩が『往生要集』には欠けているのである。

本書の最初に載せた閻魔大王のイメージも、『往生要集』が書かれた平安中期にはまだない。この絵は江戸時代の『和字絵入往生要集』の挿絵であるが、このような冥土のイメージは平安時代末期からの中世以降に広まった。

賽の河原や地獄の地藏菩薩の物語は日本だけのもので、それは平安時代末期に日本で撰述されたとみられる地藏十王経に記されている。故人にわらじを履かせ、棺に杖を入れるわけなど、

今も伝統的な葬儀で見られる風習につながる記述もある。

本書の続編として『現代語訳 地藏十王経』を刊行する予定である。

なお、本書はNHK出版生活人新書『日本人の死者の書』(二〇〇七年)の一部を改稿したものである。

二〇二一年五月

大角 修



地人館 E-books オンデマンド版
紙面のイメージは電子版と異なります。

大角 修 (おおかど おさむ)

1949年 兵庫県姫路市生まれ。東北大学文学部宗教学科卒。
(有)地人館代表。仏教・日本文化史などを中心に編集・執筆活動を行う。

著書

『日本人の死者の書』(NHK出版・生活人新書)『全文現代語訳 浄土三部経』(角川ソフィア文庫)『浄土三部経と地獄・極楽の事典 信仰・歴史・文学』(春秋社)『日本仏教の基本経典』(角川選書)『新日本の歴史』全5巻(小峰書店)『天皇家のお葬式』(講談社現代新書)『仏教百人一首 万葉の歌人から宮沢賢治まで』(法藏館)『宮沢賢治コミカル童話選』(地人館 E-books) など多数

絵入り 往生要集

著者 おおかど おさむ
大角 修

2021年5月25日

発行 ちじんかん
地人館

〒116-0014 東京都荒川区東日暮里6-56-6 長戸ビル3階

Tel 03-6806-7937 Fax03-6806-7937

<http://chijinkan.com>

印刷・製本 有限会社 朋栄ロジスティック

©2021 Osamu Okado